幼児の音楽心理

波多野完治

視聴覚的方法は受身的な人間をつくると言われる。しかしこれは、視聴覚的方法を行なう者への戒めであると言うべきであり、それを示すのに、音楽リズムの問題ほど適当なものはない。以下これについて述べることにしようと思う。

毎年、放送に視聴覚教育の懸賞論文募集があって、視聴覚教育の実際例がある。昨年も幼児教育にラジオ・テレビを利用した広島県因島重井幼稚園の村上洌氏のものが発表されていたが、それによると、「ラジオ・テレビの視聴覚教育は受動的であり、子どもが本来もつ意欲を殺し、活動能力を停滞させているのではなかろうか」という疑問を提出し、結論として、「ラジオ・テレビは受動的のみではない。子どもの聴視状態を静かに観察すると、単に受動的ではなく、子ども自身の頭の中や動きにおいては活潑に活動している。ラジオ・テレビから内容をキャッチしている。それ以後の創造力をはばむものではない」とのべている。

おとなは例えば映画などにおいて、受動的な見方ができる。しかしその逆に、能動的な見方もできる。できるだけ中に入りこむのである。体操をしている場面では、自分も体操をしたり、或いはことばを自分もしゃべったり……するのである。受動的の場合と能動的の場合では、どちらが学習効果があがるだろうか、という疑問がでるとおもうが研究の結果によると、受動的でも学習できないことはないが、30～50%、能動的の方が効果が高いのである。それ故、視聴覚的方法を使う場合は、できるだけ、ボーッとみているのではなし

に、能動的態度をとらせるよう工夫することが望ましい。これは、ラジオ・テレビばかりでなく、何をするにもあてはまることである。歌を覚えるのにもきいているだけではなかなか覚えられない。覚えたいと思ってなるべく歌を一しょにうたえば覚えやすい。自分で覚えてしまおうと思う態度が大切なのである。

幼児では、パッシブとアクティブが未分化である。それで、音楽を聴いてもアクティブになってしまい、まわりの人にとってはうるさくなりがちである。ラジオのリズムに合わせて動き出したりする。これは幼児が活動的であることとも対応するが、受身的な態度になりにくいからだということもできる。受身的態度は価値の低い消極的なものではない。高度の精神生活を必要とする。もちろん学習からみれば、効果は低いが別の意味で大切な態度なのだ。

村上氏は「ラジオはお行儀悪く聞く子どもでも案外よく聞いていて、あとで聞いてみると内容を把握している。不注意ではないのである。アクティブな参加をしながら聞いている。」と言っている。フランスでも日本でも、じっとしていることをしつける。子どもにとってはこれはたいへんなことなのである。じっとしていることは緊張を要する。じっとしていることに神経をとられて、聴くどころではない。じっとしているということは、舞台でやっていることと自分達との間に距離をおくということである。これは子どもにはむずかしい。同一化してしまうからである。ところがおとなにはできる。芸術鑑賞の態度がそれである。

最近、テレビや映画は子どもにどういう影響を与えるか、という研究が行なわれた。対象は幼児ではないので類推するほかないのであるが、興味ある結果が得られた。暴力、性的な場面に影響されないという態度はいつできるか。高校生では50％できる。これはどういうことか。先にのべたアクティブな観察をしないということである。芸術では、ながめるということが必要である。芸術はながめているだけでよいのか。ある種のオーケストラなどはながめているだけである。それについて、日本の観客は少し冷淡だ、と外国の音楽家は言う。外人よりも日本人の方が自分をおさえて聴いている。音楽を聴くのには能動的に参加して聴く方がよいのではないか。これは幼児の時からの習慣かもしれない。むりにおさえずに、それより自分もいっしょになってうごくつもりで、好きな音楽を聴かせる方がよい。子どもによってはふだんはあまり喜ばないのに3拍子のものは特別に喜ぶといった場合、

特別な才があるのかもしれない。どういう曲を喜ぶかを見抜いて、それを参考にして教育することがよい。ただ見たり聴いたりする音楽教育は幼稚園教育では行きすぎである。

問題は、幼児教育者がやりたいと思うことと、世の中で行なわれている音楽とのギャップが大きいことである。幼稚園では、西洋の古典音楽の方につれていきたいと思っている。それなのに世間で流布しているのは、歌謡曲である。これがマスコミを通じて流れている。これが幼児教育者の悩みの種である。しかしこの歌謡曲の氾濫は、日本の音楽史を考えてみると当然こうなる必然的理由があったのである。私は、だからそれでよいではないかと言うのではない。歌謡曲の氾濫は百年来の音楽史からみると当然ということを認めるべきなのである。しかしこの問題は音楽史とか音楽社会学で扱う問題である。

その次にやらねばならないことは、子どもをアクティブにすることである。アクティブになるか、何もしないで過ごすかということは歌に著しく左右される。アクティブにするのにはどうすればよいか。それはモティベーションの問題である。モティベーションをおこせばアクティブになり、おこさなければアクティブにはならない。幼児の時、西洋音楽にモティベーションをおこすのは特殊な人かもしれないが、やさしい曲への関心は小さい時からもつことができる。モティベーションをおこすことは 1、幼児教育者と家庭が歌謡曲にどういう態度をとるか、2、幼児教育者が、望んでいる音楽教育にどういう態度をとるか、この二つに左右される。私の先輩にあたる大学の先生の家庭では、3歳の子どもがレコードをかけた。レコードをかけるということはそんなにむずかしいことではない。その家には古典音楽のレコードしかないから、聞くものは全部古典音楽だった。自由にかけられるということが一つである。これは親のもつ態度にあたる。もう一つは、ラジオの歌謡曲を自然に覚えてしまう――モティベーションがない学習――ということが従来強い意見だったが、何回もくり返すだけでは学習効果がうすい。それよりも幼児の心の構造とマッチした音楽を与えることがよいのである。これは絵画が心の奥底をあらわすということと関連している。歌謡曲などをしょっちゅう聞かされて覚える、ということに対して腹をたてる人がいるが、こういうものは、もしも子どもがアクティブな態度をとらなければ、長く覚えていずに忘れてしまうものである。忘れないときもあるが、その場合は幼児の心部構造にその理由がある、と心理学者は説明

する。それらは、遅かれ早かれ覚えるものである。ないにこしたことはないが現実にはある。しかし覚えても忘れる。忘れてどうなるか。幼児教育者・家庭がどういう態度をとるか。よい音楽を、自分も子どもも、聴きたいだけ聴くのがよい。モティベーションが大切であるということは、今日の幼児の音楽心理の結論である。

次の問題は、幼児にどの位訓練をするかということである。古典音楽は、基本的に、形式などむずかしい。才能教育と呼ばれているが、幼児がどの位理解できるかは、今のところわかっていない。しかし、現在より別な方法があると思われる。才能教育と言ってもいろいろある。幼児のもっている自然的なリズム感・メロディー感を引き出していこうとするものと、それらとは関係なく、やさしいものを、褒賞を用いながら与えていくというやり方がある。ベートーヴェンは父親にきびしく教えられ、泣きの涙でピアノに向かった。今の心理学では、そんなことをしたら普通の子どもならきらいになるはずである。おそらくベートーヴェンは音楽に対する何かをもっていたから、大音楽家になったのであろう。従来、音楽教育は早い方がよいとされてきたが、最近はレディネスのおくれはとり返しがつくと言われる。何歳からがよいかは明らかではないが、12歳とか15歳とかいう説もある。レディネスはそんなに若いうちに始まって若いうちに消滅するものではない。時期も大事であるが、早い方がよいということにとらわれない方がよい。レディネスよりもモティベーションの方が大切である。本当にやろうとしているのかどうか、である。もう一つ大切なのは健康である。精神的肉体的にそれに耐えることができるか。いくらモティベーションがあっても健康でなければだめである。モティベーションと健康さえ揃っていれば、才能教育をやることは必ずしもわるいものではない。しかし才能教育だけでマスコミによる悪いものを克服することはできない。どうしたら克服できるかは日本の音楽界全体、音楽文化全体の問題である。どういう音楽にモティベーションをおこさせるかが大切である。そのようにやっているではないか、と言うかもしれないが、それならば今のように歌謡曲が氾濫しているはずはない。音楽文化は30年ごとの周期をもっている。今の幼児が35歳位になれば……ということになる。モティベーションをおこして、いやでもよい音楽を聴くように環境をつくりだすことが大切である。

＊　＊

（お茶の水女子大学）